

菊地一雅著 村落共同体の構造

— 熱帯の社会経済地理学的研究 —

どの地域でも社会発展の段階における共同体の形成は重要な問題であるが、ことに熱帯という特殊な自然環境を背景として、どのような共同体社会が形成され、そこにどのような生活が展開されてきたかは重要な一つの地理学的テーマであり、これを歴史の変遷のなかでとらえれば歴史地理学の大きな対象となる。本書はグローバルな視野に立って世界の熱帯のうちでも特にベトナム、ラオス、マダガスカル、セネガルおよびアンデスの諸地域をとってこの問題を述べたものである。以下本書の内容を紹介しながらコメントを加えてみたい。

本書は六章にわかれているが、まず第一章では熱帯というもののひとつ自然的・人文的特色を概観し、第二章から本論に入ることとなる。第二章「ベトナム」では中核地域としてのトンキンデルタの自然条件から説きおこし、そこに民族の専制王国が成立したが、その社会的単位としては一一—三世紀の李朝時代にできた「社」(サ)であり、これはいくつかの小部落をまとめたものであること、その成立の条件としては共同の守護神のあること、国王の許可が必要であったこととする。また土地は基本的には国王に属するものであったが実際的には公田制度により共同体の成員に配分されて物質生活の基礎をなしたこと。「社」の運営には長老政治やオリガキーが

支配的であり、やがてその住民に、管理するいわゆる郷紳グループと、管理される一般農民の区別を生み、長幼の序列が確立したことを述べる。郷紳グループは大土地所有者、官吏、商人たちではほとんど老人層から成り、かれらが三年ごとの「社」の土地割当てをきめ、租税を集め賦役を決定したこと、土地配分は本来平等なはずであったのが次第に階層による不平等を生じたことなどを記す。また奴隷も存在したがそれは苛酷な条件の下で働かせられたのではなく、一種のサーヴァント的機能をもつにすぎなかったという。こうした伝統的な共同体「社」が近代のフランス植民地下で大きく変貌するに至るのであるが、そのプロセスについては著者はあまりふれていない。ただ独立後特に北ベトナムの社会主義化政策で新しい農村共同体としての「合作社」が生れるに至ったことを記している。

第三章「ラオス」ではその自然と民族(ラオ族)の歴史をのべたあと、ここではチャオとよばれる共同体が形成され、土地を開いたものがすべての所有権をもつ慣習があったことを記す。ラオスではメコン川上流での灌溉組織を中心として早くから小さな共同体がつくられたが、それが一四世紀中ごろのランサン王国の発展により一層家長的共同体の特色を大きくしたこと、さらにこの圏では低地と山地とでは居住する民族にかなり差異があり、それは生活の差異ともなっているのが著者はこの民族誌的記述も行っている。こうしたラオスの社会は近代のフランス領時代にも殆んど変らなかつた。それはフランスがベトナムに専念してラオスにはほとんど手をつけなかつたためであった。しかし第二次大戦後はこの桃源郷にも左右両派の内戦がひろがり、ついに社会主義国家に急転したが、そこでの

急激な社会変化の状況については資料に乏しいためもあって余りふれられていない。ただ本章の終りにケースタディとしてヴィエンチアン平野の二つの村をとり、農村に及ぼす都市の影響を比較して記してある。ここでは都市の影響下に著しい変化は生じてきたものの、なお伝統的なラオスの共同体の生活が展開されているという。

第四章「マダガスカル」ではまずこの大きな島の自然条件を説き、ついでその住民、特にこの島で重要な役割を果たしてきたマライ系民族の移住について述べてある。マダガスカルの社会は初めは氏族的特色をもち、フォコノロナとよぶ共同体を形成し、焼畑によって生活を行っていたが、マライ系のホヴァ族が島の中央部を占拠してから稲作が発展したと、かれらはやがてイメリナ王国をつくり、カースト制も発注し、一七〇一八世紀には島の他種族を支配して強大となり、タナナリヴを首都とし、前からのフォコノロナ共同体を一層発展させるに至った歴史が述べられる。フォコノロナ制度にあつては土地は国王のもので国王により配分される。その配分は一族が一年間の食料を得られる水田が基準であり、共同体による会議も存在し、一般に個人は共同体の中に埋没し、団体によるさまざまな強い規制のあることが指摘される。一九世紀中ごろからフランスがここに侵入してきてフォコノロナを解体させ、新しい村を建設しようとしてきたが、それは失敗し、結局伝統的なものが残った。現在もフォコノロナは依然として機能しており、著者はウールツの調査を用いてタナナリヴ周辺の村におけるその状況をくわしく述べている。

第五章「セネガル」ではやはり西アフリカのこの地域の自然と複雑な種族構成をもつ住民について概観したあと、一般にアフリカで

はリネージによる単系（父系あるいは母子）氏族集団の社会が卓越し、そのかしらとしてマヴォド・ルノールとよばれるものがおり、またこれら家族の結合が社会生活の基礎をなし、セネガル中央部ではこの集団をガレとよぶことが述べられる。ここでもその土地に初めて住んだ集団が土地への権利をもつものであり、マヴォド・ルノールはこの場合、母権・父権の権威と土地配分のルールをつねに確認する役目をもつのである。

セネガルの中心をなすのはセネガル川中流々々のフータ地方である。ここは肥沃で諸民族をひきつけたが著者は乾季・雨季による自然状況とそれが土地生産性に及ぼす影響を述べている。そしてここに一三世紀にはウォロフ王国が成立したが、これは単一の氏族集団共同体が後進的共同体のいくつかを統合、拡大して成立したものであること、その王はさきのマヴォド・ルノールの家系で母系制を維持するものから選ばれたこと、その下の社会はヒエラルキー構造をなし、王に対する貢賦は共同体の有力家族を仲介に行われ、絶対的専制が一九世紀後半、フランスによる植民地化が遂行されるまで続いたことなどを明らかにする。フランスはセネガル川流域の肥沃さに注目し、農業移民を送りこんでプランテーションを経営したが、これは地域的には下流域が主で、伝統文化の中心であった中流域では依然として古い制度が残された。今も耕地はリネージの共同使用によるものが多く、近代的な個人所有ではないこと、身分制度としてのカースト的なものも存在しているが、近年は共同体の閉鎖性による現金収入の乏しさから、外部へ出かせぎにおもむくものも増大しているとのことである。

第六章「ラテン・アメリカ」ではアンデスの自然条件を説明し、そこにインディオが住みついてやがてアイユウと呼ばれる共同体を発達させたこと、はじめは砂漠のオアシスや海岸地域を主としたが、次第にアンデス高地に社会が拡大されたこと、アイユウでは共同の祖神を祭り、単系氏族による土地所有が行われ、家族の大小によって土地が配分され、労働も共同でなされたこと、こうして九〜十三世紀までにはインカ帝国形成の社会的素地が準備されたことを明らかにしている。

ついでインカ帝国時代にうつり、その中心地域としてのアンデス中部の自然と生産の概観を述べてからインカ社会の記述に入る。ここでは社会の基礎的細胞は伝統的なアイユウ共同体であったが、帝国の形成によって共同体は役人に管理される新しいマルカ集団に組み入れられ、土地は三分されて、皇帝、地方役人および村民がそれぞれ三分の一ずつを所有することに改められたこと、奴隸制も導入され、本来のアイユウ共同体に大きな政治性が加わってそれが国家の細胞と化したプロセスを説く。またマルカでの土地配分や貢賦の方法などについてもくわしい説明がある。一六世紀初頭からのスペインの侵略によりインディオ本来の共同体はそれからインカ時代の国家的要素を除去されたものの、こんどは植民地経済に組み入れられていわゆるエンコミエンダの支配下に入り、原住民の土地所有権の剝奪、共同体そのものの破壊、現物を主とする重税などにより社会組織は根底からくつがえされるに至った状況が述べられている。現在はインディオの居住する土地は集団的に共同体のものとして一応きめられているものの、実際上はその面積はわずかであり、土地条

件も考慮して生産性も低いことが指摘される。

以上が本書の内容であるが、次にこれについて若干のコメントを加えることとしたい。

(1) 本書は熱帯という特殊な風土に対応して生活してきた人間とその社会の歴史的経過の比較でもあり、その記述は歴史地誌的でもある。著者は同じ熱帯でもそれぞれ異なる地域的条件のもとに成立した共同体がいかなるプロセスで存在しつづけたか、また現代においてそれがいかに変化したかをとらえようとしている。叙述の時間的連続性などの点では資料的制約もあつてか、なお十分でないものもあるが、こうした研究は重要であり、著者みずから本書をその「序説」と述べているようにさらに今後の成果を期待したい。

(2) 民族社会の発達史の研究にさいしては、資料を世界の諸民族のあれこれからアット・ランダムに引用することは危険であり、比較によって歴史のあとづけを試みるには同一の文化領域からその資料をえらぶ必要があることは社会学者により指摘されているところである。この点で本書の諸民族のとりあげかたについてはいろいろの批判も出ることであろう。しかし熱帯という一つの大きな共通の風土を一つの指標として選んだことは、それなりの意義をもつものと思われる。本書が「地理学的研究」と題されている限りにおいてはそれは比較研究の基準たり得るからである。これについてはかつてステイール (R. W. Steel) がその「地理学と熱帯」(一九五六年)で強調したように、熱帯諸地域の研究と比較を通して横に熱帯圏全体を包含する一つの地理学的アプローチへの発展の可能性を含むからである。

(3) 共同体そのものについて、著者が各地域において土地所有の問題を重要視し、記述していることは評価される点である。しかしおよそ農業共同体の存在するところ必ず相互扶助的な慣行（たとえばインドネシアのゴトン・ロヨン制のような）があり、それが各地域でどのように展開され、どのように変化してきたかについて十分にふれられていないのは残念である。

(4) 本書で扱われている地域の中にはなお多くの未解決の重要な問題も含まれている。たとえばマダガスカルへのマライ系民族の移住やその時期などについてである。これはなお多くの論争のあるところで、著者は簡単に「島の先住民はマライ系である」（一—三ページ）としているが、島の南部タラカイでの考古学的調査によってもマライ系民族の到着はアラブ・ペルシャ人などのそれよりずっとおくれたものようであり、先住民はコモロ諸島を飛び石として東アフリカからきたバンツ・スワヒリ系黒人という説が有力である。またこの新しい土地へ渡ってきたマライ系民族が郷土における共同体社会をここでどのように変形させたのか、いわゆるフォコロナとの関係はどうなのかについても詳しく知りたいものである。

またインカの社会制度でトラカを頂点とする官僚制については述べられているが、この制度の導入により形成されたとする「マルカ集団」（*マニ—ペーシ*）とはあまり耳にしない名称である。伝統的にアイヌウの成員の中から選ばれた村長（*マユカ*）が共同体の指導者であったとされているが（泉靖一、インカ帝国）、それから出た名称でもあるのか、これも知りたいところである。

(5) 著者はもっぱらフランス側の文献にたよっているが、たとえば

共同体の現在における変貌の状況を明らかにするにはこのほか民族学や文化人類学におけるドイツ、イギリス、アメリカ側の現地調査の報告などをもっと利用する必要がある。それによって本書がやや歴史的過去に重点をおきすぎた点にも平衡が与えられることとなる。

(6) こまかい点になるが固有名詞の記述はやはり慣行のものに統一してほしい。たとえばマダガスカルの *Ilava* は「フォーバ」でなく「ホヴァ」に、インディオのとうもろこし *Quindia* は「チチア」でなく、「チッチャ」というふうに。

(7) ともあれ、本書は現在のいわゆる第三世界の住民の生活の研究にさいしてその原点ともいえる村落共同体の構造にメスをいれた点で啓蒙的な価値をもつものといえよう。（別技篤彦）

A5判、二五六頁、大明堂発行、昭和五二年五月、二〇〇〇円。

〔文献紹介〕

松原義継著 本阿彌輪中

別技篤彦氏の論文を先駆とする輪中研究は近年とみに活況を呈し、安藤万寿男氏・伊藤安男氏等の力作が次々と世に問われている。松原氏も多年この方面の研究を積まれていたが、その集大成としてまとめられたのが本書である。

通説を終えて本書には幾つかの特色があることに気づく。第一は研究それ自体の特色で、書名にもうかがえるように数多い輪中の中